

まえがき

虐待の穴に落ちかけた私

私は、20年ほど前、介護職として特別養護老人ホームで働いていました。それは、夜勤をしていたときでした。夜勤は職員2人で約50名の入居者さんを介助し、見守りをします。時間は16時から翌朝9時まで。夜間、定時のおむつ交換を5〜6回行うことになっていました。

その日は、もう一人の職員が「林田くん、私、今日体調悪いから4時間休憩していい？」と言ってきました。つまり、私の休憩時間も自分にくれないかということです。私は、当時20代半ば。相手は40代半ばのちよつと怖い女性でした。もう、イチも二もなく「大丈夫ですよ！」と。そう言った以上、一人で頑張るしかありませんでした。

深夜0時頃のおむつ交換は、だいたい20人から25人だったと思います。

それを始めたときでした。遠くのほうから全開の蛇口から水が「ザーツ」とあふれる音が聞こえます。慌てて音のするほうへ向かって走っていくと、居室（4人部屋）にしている洗面台から水が勢いよく出ていて、今にも洗面台から水があふれそうになっていました。私は急いで蛇口を閉めました。近くには、入居者のKさんが立ちすくんでいました。たぶんKさんが蛇口をひねったのでしょうか。

Kさんは、私がデイサービスから特養に配置換えになったときに入居してきた方です。なんとなく馬が合い、“同期”のように感じていました。昼間は、体操をされたり、陽気に話をされたりしますが、この頃は認知症の症状から落ち着かなくなり、睡眠薬の投与などもあり、昼夜逆転がみられていました。

水を止めた私は、Kさんをベッドのほうに誘導し、おむつ交換の続きに戻りました。それから2〜3時間後。再びおむつ交換を始めたとき、さつきと同じ方角から水が出る音がします。あつと思ひ、部屋に駆けつけると、

やはりKさんが立ちすくみ、洗面台から床へと水があふれていました。滑ると危ないので、バスタオルを持ってきてすぐに拭き取りました。そして、またKさんをベッドに誘導し、就寝を促しました。このとき、私は心の中でこう思っていました。「いい加減にしてよ」。

それからまた2〜3時間後。明け方4時近く、夜勤帯での最後のおむつ交換です。私はこの時間をもっとも苦手でした。疲れと眠気。この日は、一人ですべてしなければならなかったことに対する不満と怒りがつのっていました。そのような状態のときに、また水の音……。

「あっ、まただ!」。私は、あの部屋へ飛んで行きました。やっぱり水があふれています。先ほどよりたくさん水がこぼれています。しかも、トイレの便器からも水や便が流れ出ています(その部屋には、洗面台の反対側にアコーディオンカーテンで仕切られたトイレが1つありました)。

「おおおおおお」。蛇口を閉めて、アコーディオンカーテンを開けると、そこには足や手にうんこをこびりつかせたKさんがいました。おそろ

くKさんは、尿とりパッドをトイレに流してしまったのでしよう。それによつてトイレが詰まったのだと思います。

Kさんの体を拭き、着替えの介助が必要でした。Kさんはリハビリパンツを履いていました。それを脱ぐには、横を破けば簡単です。でも、履くのは至難の業です。なぜなら立ったまま履いてもらおうとすると、片足立ちにならないといけません。いすを持ってくればよかったです、そのときの私にそんな余裕はありませんでした。なぜなら、たくさんの入居者さんの排泄介助が遅れていたからです。

仕事が遅れていれば、休憩明けの女性職員に「林田君、全然できてないじゃない」と言われるに決まっています。この時間帯の排泄介助が遅れると、起床介助も遅れて、食事介助も遅れて、早番で出勤してきた職員に非難される可能性もあります。さらに、食事介助が遅れると、調理場にも迷惑をかけます。私の頭の中は、焦りと眠気と疲労とで思考できない状況でした。

そんな状況のなか、Kさんに足を挙げてもらおうと、私はひざまずいて、「Kさん、こっちの足を挙げてください」と必死に言います。ところが、Kさんは片足になることが不安なのか、言うとおりにしてくれません。Kさんの手を取り、「私の肩をつかんでいいから。足を挙げて」。うんこの付いたKさんの手がかつしりと私の肩をつかみます。うんこの匂いがあるなか、「この上着、着替える時間があるかな」などと余計なことが頭をよぎります。あまりにもKさんが足を挙げてくれないので、なかば強引に足を持ち上げようと思いますが、ますます足を踏ん張るような状況です。その瞬間、嘘ではなく、私の頭の中に「善悪メーター」が浮かび、矢印が善から悪へ振り切れる音がしました。

「Kさんの腹を殴ろうかな」。イライラしてということではなく、殴ることでKさんの体が屈曲し、床に横にしてからリハビリパンツや衣類の交換をすればいいやと思ったのです。正常な思考や判断ができなくなっている状況でした。

結局、私はこの最後の一線を越えることなく、現在までこの仕事を続けることができています。それは、たまたま洗面台の鏡が目に入ったからでした。ひざまづいていた私は、車いす用に前傾している鏡をちょうど見ることができました。そこにいたのは、「Kさん、足を挙げてください」などと丁寧な言葉を使っているものの、^{やしや}「夜叉」の顔をした私そのものでした。夜叉になった自分を見たとき、ふと我に返りました。そして、「あー、自分もしよせん偽善者なんだな」と気づいたのです。周りの職員から、認知症の症状が激しいKさんの扱いがうまいなどと持ち上げられ、Kさんだったら言うことを聞かせられると思いがついていた自分のなれの果ての姿がその鏡の中に取りました。

そもそも、他の職員から「Kさんの扱いが……」などと言われたときに、Kさんを「物」のように表現していることを戒めるべきです。また、「言うことを聞かせられる」など、甚だしい思い上がりです。それに気づいていなかったのも、こうした心理状態になる遠因であったことは間違いあり

ません。

一皮むいたら偽善者の私。そして、いざ追い込まれると夜叉に――。そう自覚をした瞬間に、急に肩の力が抜けました。

女性職員に何か言われたら、「あなたのぶんもやっておいたのでね」と言い返せばいい。食事が多少遅れたって死ぬわけではない。イライラを爆発させてKさんに暴力をふるうほうが、よっぽど誰のためにもならないし。そんな開き直りにも似た気持ちになりました。そのときでした。私の心を見透かしたかのように、Kさんが挙げてほしかった足をスッと挙げてくれたのでした。



当時のこのことを回想するのは、私にとって本当につらく、心苦しいことです。情けないとも思います。しかし、こうして書いたのは、同じような体験をしている介護職がたくさんいるだろうと思うからです。人に話せ

ずに退職したり、介護の仕事を辞めてしまったり、あるいは実際に虐待に及んでしまったりする人が少なくないと想像するからです。私の体験談が、少しでもこのような人たちの現状を好転させるきっかけになればと思うからです。

私の例のように、介護現場で苛立ったり我を忘れてしまったりするような状態が日常化していくと、恐ろしいことに、認知症状態にある弱い立場の方に対して、暴言を吐いたり、暴力をふるったりするという選択をしかねません。自分自身を省みたり、内面と闘ったりする前に、簡単に自己を正当化し、「認知症だから仕方がない」「相手が悪い」などと考えてしまうのです。そこに至る要因には、人手不足の現場において、多忙を極め、「仕方がない」「無理だ」「昔からやっているし……」といった思考停止なども存在します。

もう一つ、とても怖い現象があります。それは、虐待は止められなくなる可能性があるということなのです。

ほとんどの介護職は、「虐待なんかしない」「してはいけない」と考えています。精神的な苛立ちや判断力の低下はあっても、そこで留まります。また、自らストレスの緩和を心がけ、さまざまな方法で虐待を遠ざけます。あるいはそこに近づいたことで、罪悪感や後悔の念から退職などを選択します。

しかしながら、これ乗り越えられずに虐待を続けてしまう人たちがいます。結局のところ、徐々に感覚が麻痺していつているのです。感覚が麻痺するだけではなく、虐待を行うことでストレスを解消したり、スッキリする感覚を味わったり、あるいは興奮を覚えたりして、それを脳が快感ととらえていることもあります。そうなってしまうと、意図的に虐待に走ってしまふようになります。こうなれば、もう防ぐことも避けることができせん。この状況になると、完全に虐待という犯罪に手を染めてしまつていくといえます。こうした虐待はこっそりと行われることがほとんどです。で、対策や原因の究明が遅れかねません。

最近、福祉施設における虐待事件のニュースが後を絶ちません。介護職による虐待はどこまで広がっているのでしょうか。とても大きな不安に駆られます。

この本は、私なりに認知症状態にある方への虐待に関する情報や意見・考えをまとめたものです。私の体験を中心に書かせていただいたので、その内容は介護施設やグループホームが中心となっています。しかし、虐待は施設やグループホーム以外でも起きます。さまざまな状況を想定して読んでいただければと思います。

CONTENTS

PART

1

魔の3ロックと虐待

1 魔の3ロック

..... 23

2 無自覚の虐待

..... 35

3 なぜ認知症の人は虐待を受けやすいのか

..... 40

4 介護職も追い込まれている

..... 46

PART

2

虐待に至る不適切な対応とは

1 友達口調・命令口調

..... 54

2 ため息・舌打ち

..... 58

3 あざけり・からかい

..... 60

4 不適切な対応の本質とは

..... 65

PART
3
うちの施設で虐待がありました

- 1** 不適切な対応の芽 70
- 2** 不適切な対応の深刻化 78
- 3** 虐待への道 82
- 4** 虐待発生直後に行ったこと 88
- 5** 虐待事件がもたらしたもの 92

PART
4
虐待へつながる道を断つ 97

PART
5
虐待を起こさないうちのためにできること

- 1** 目的を共有する 108
- 2** コミュニケーションを高める 111
- 3** 言いにくいことを言い合う 115
- 4** 気づきを深める体験 118

5 研修と仕事における脳をつなぎ合わせる

121

6 拘束などの体験

124

7 センター方式を使う

130

8 ビデオ撮影で客観視

133

9 面談を重ねる

136

10 記録と事故報告書

142

マジックテープで固定し、立ち上がれないようにするなどです。その他、手足をベツド柵にひもやさらしで縛りつけたりします。手指の機能を制限するミトンの他、両手・両足・腰・胸の6点を抑制するものまで、身体拘束具として製品化されているものもあります。

私が勤務していた当時（1990年代後半）の特養には、「つなぎ服」というのがありました。自分でおむつを外したり、便をいじったりできないように、背中にフアスナーや小さな錠が付いている代物でした。

今なら、その方の排尿や排便のタイミングに応じて適切な時間に介助するのが普通ですが、当時は決められた時間にしか介助を行いませんでした。したがって、排便・排尿があったときのおむつ外しを防ぐために、このつなぎ服を着せるのです。これを着せられた入居者さんは、おむつ交換の時間までどんなに気持ち悪くてもどんなにうんこまみれになっても、おむつに手を伸ばすことができません。

ただ驚いたことに、今、ネットで「介護用品／つなぎ服」で検索すると、該当のものがヒットします。現在でも5千円から6千円くらいで販売されているのです。



1970年代の終わりに登場した「つなぎ服」。
現在では用いることは許されないが、
当時、施設や病院において驚くほど普及した。
photo◆田邊順一

3

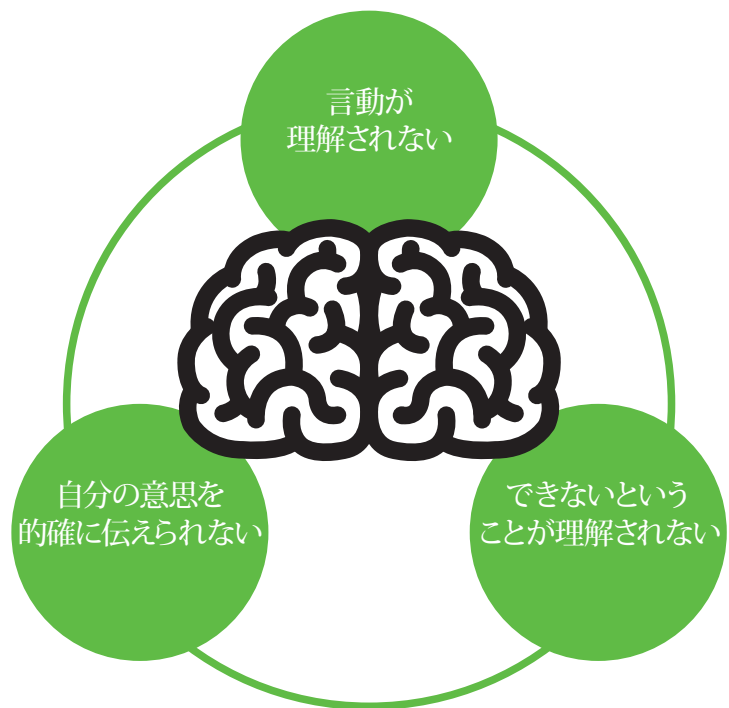
なぜ認知症の人は虐待を受けやすいのか

虐待や虐待に等しい身体拘束、不適切な対応……。これらを認知症状態にある方は被りやすい状況にあります。その主な理由として、「言動が理解されない」「できないということが理解されない」「自分の意思を的確に伝えられない」の3つがあげられます。

言動が理解されない

認知症の症状は、痛みや発熱などとは異なり、主に「言動」として現れます。それらは、周囲の人からは、奇異や不可解に映ることがあります。たとえば、次のようなものです。

認知症の人が虐待を受けやすい理由



stage I 初期

明らかな虐待はみられないが、職員は疲れた顔やこわばった表情、きつい眼差しで働いている。利用者さんの表情も暗い。自分がやらなければならないことに追われ、利用者さんからの声かけや視線に気がつかない。無表情で返事をしたり、声色に苛立ちが含まれていたりする。時折、丁寧な返事や柔らかい表情もみられ、適切に対応できているときもある。

対策 職員相互で、言動や表情に気を配る必要がある。また、グループホームなどであれば管理者が、特養などであればフロアリーダーまたは主任が、職員に声をかけ、精神的な疲労・肉体的な疲労を把握する。それと同時に、職員間の関係性が上下関係だけに固定していないか、互いに意見が言いにくい状況になっていないかなどに気をつけ、それを改善していくことが求められる。直接介護を行う立場の責任者は、「スタッフの対応で〇〇さんの表情が明るくなった」「〇〇さんがとても素敵ことをおっしゃっていた」など、具体的なことを言葉にして伝え、大切なことを忘れそうになっている職員に、そのことを思い出させるような工夫が必要。

友達口調・無礼な言葉

常に「タメ口」(友達口調)だったり、無礼な言葉を使う。状況や利用者さんとの関係性を把握できておらず、適切かつ柔軟な言葉づかいができない。丁寧な言葉を形式的に用いているだけという場合もある。

手をやや強く引く

利用者さんの斜め前に立ち、利用者さんと同じ方向を見ながら手を引く。もしくは、正面に向かい合って立ち、後退しながら両手を引く。その際、手は体を支えるために差し出しているのではなく、利用者さんの手を引くことを意図している。本人の意思(行きたい方向)や歩行速度に合わせることなく、職員が方向やスピードを決めている。

ため息・舌打ち

利用者さんの面前ではなく、利用者さんのいないところで、ため息をついたり、舌打ちを行ったりする。たとえば、便で汚れた衣類を洗濯する際や、排せつ介助・入浴介助の前後など。仕事の多さや難しさに対してそれがみられるのではなく、その背景には、仕事に対する不平や職場の人間関係に対する不満などが潜んでいる可能性がある。

不十分な声かけ

介助の際には利用者さんの意思の確認が必要だということを学んでいるものの、十分に理解していない。たとえば、車いすの利用者さんの移動介助を行う場合、「〇〇さん、動きまますね」という声かけがなく、相手の意思・様子を確認することもない。こうした場面での心境として、「作業を早く終えたい」という思いがあることがうかがえる。このように、十分に声かけを行うことなく、利用者さんの存在を軽んじ、職員の都合で物事を進めようとする。

P R O F I L E

林田俊弘

Hayashida Toshihiro

NPO法人ミニケアホームきみさんち理事長

有限会社自在取締役社長

1968年、福岡県生まれ。

銀行を退職後、

デイサービスや特別養護老人ホームなどの介護職を経て、
1999年、グループホーム「ミニケアホームきみさんち」を開設。

現在、都内で計6か所のグループホームを運営する。

東京都地域密着型協議会副代表、

全国グループホーム団体連合会副代表としても活躍。

本書へのご意見・ご感想、
および著者への講演・研修依頼等については、
下記宛てにお願いいたします。

株式会社harunosora編集部

kabu.harunosora@gmail.com

FAX044-330-1744